

ふれあひ人。

おおの
大野さと き
聡基さん

社会福祉法人 北養会

介護老人福祉施設 長生園 介護福祉士



水戸市堀町の住宅街に位置する長生園は、利用者の自分らしい生活の継続を第一に、尊厳の維持を大切にした対応を心がける介護老人福祉施設です。大野聡基さんは、介護福祉士として勤務し、今年5年目を迎えます。大野さんが福祉の道を志したきっかけは、「高校生の時に祖母が倒れ、施設に入所することになり、その時に、自分は祖母や同じ状況の方々に何ができるだろうと考えるようになりました。進路選択の時期でもあり、福祉専門学校のオープンキャンパスに参加し、福祉を学んでみようと思い、いばらき中央福祉専門学校に進学しました」とのこと。

卒業後は長生園に入職、身体などに不自由のある高齢者の生活を支えています。仕事を始めて感じたことは、「一人ひとりの高齢者の方にそれぞれに違う人生があり、一人ひとり違う生き方がある

のだと改めて感じることができました。一人ひとりのその人らしさを尊重していきたいし、短所があっても長所もあるということに気づいて接していくようにしています」と話していました。

「ありがとう」の言葉にやりがいを感じる

仕事でやりがいを感じるのは、「ありがとう」の言葉を聞いた時だと言う大野さん。「何気ない言葉かもしれませんが、福祉の仕事は介護を必要とされる方、利用者のご家族、一緒に働くスタッフからも『ありがとう』と感謝されることが多い仕事です。『ありがとう』の一言が日々の仕事に向き合う大きな活力になり、自分のやりがいになっています。」「ありがとう」の言葉をたくさん聞いてきた大野さんの心に残る「ありがとう」は、仕事を始めて3年目、ずっと担当していたユニットの利

「君がいてよかった」と 思ってもらえる介護士になりたい。



利用者さんが亡くなられたときのことです。「最期に『ありがとう』と言ってもらえて、ご家族の方にも『最後まで看てもらえてありがとう』と言われました。悲しいのですが、後悔せずに最期まで関わることが良かったと思いました」と振り返ります。

目標は、憧れの先輩の右腕になること

明るく元気で、利用者からもスタッフからも好感を持たれている大野さんですが、仕事をしていて大変さを感じる時もあるということです。「思うように自分の考えがまとまらない時は、頭で考えていても行動ができなかったりします。やってみて違うと思ったら、一度立ち止まって落ち着いて、考えを変えるようにしています。また、そういう時には先輩に相談し、アドバイスをもらって乗り越えています。先輩たちを見ていると、キャリアを積むことで考え方も変わっていくのだと実感しています」とのこと。

「君がいてよかったと思ってもらえる介護士になりたい」と言う大野さんには、同じユニットに憧れの先輩がいるそうです。「その先輩の右腕になることが目標であり、他の人のために動ける人、常に周りのスタッフや入居者のことを考えながら対応しています。自分もそうなりたいと思い頑張っています」と話していました。



ではないし、疲れて立ち止まることもありました。しかし人の人生に携わることができるし、感謝してもらえる仕事ができる、それが自分のやりたいことなので今、続けています。気持ちがあれば大丈夫、やってみたいと思ったら行動するのが一番です。誰かの役に立ちたいと思っている人を待っています」という思いのこもったメッセージを返してくれました。

自分が最もキラリと輝いている時間は、利用者に関わっている時間だという大野さん。普段の生活の中でも「人生でこの人に会えてよかった」「これからも関わってもらいたい」と思ってもらえるように、日々コミュニケーションを図っているそうです。「この人は何が好きなのだろう、生きがいはなんだろうなどと考えながら支援して、利用者の生活が輝く瞬間が自分にとっても輝く瞬間なんだと思います」と話すさりり人です。



誰かの役に立ちたい人を待っています

福祉の仕事に向いている人についてたずねると、「誰かの支えになりたいという想い、誰かを助けたいという気持ちを持っている人が向いていると思います。誰かを支えるのは、いろんな形がありますが、人生に携われるのは福祉の現場ならではです。自分は祖母のような方の助けになりたいと思い、勉強してここまでできました。いいことだけ

